

ものが言えないふたりから
ものが言える子供が生まれた
指先で謳うこの喜びと
忍び寄る悲劇とは
かつて、人々を
感動させてやまなかつた

高峰秀子
小林桂樹

加山雄三
沼田曜一

原 泉
草笛光子

監督・脚本■松山善三

製作■藤本真澄・角田健二郎
東京映画製作／東宝株式会社配給

東宝

文部省特選
優秀映画鑑賞会特薦

「生きる」に続く名作シリーズ第2弾

夕にもななく
命貝しく
美しく



1月下旬

名作シリーズ
特別ロードショー

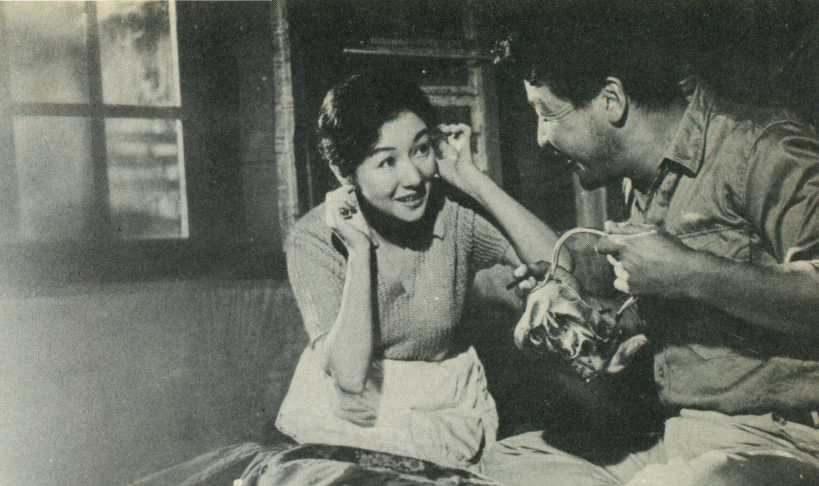
ニュー東宝
シネマ 2

(571) 1947

新宿
ビレッジII

(351) 3129

美しく貧しく名も



解説

昭和36年1月、松山善三が第一回監督作品として世に問うた不朽の名作です。終戦直後の苦難の時代に、聾啞(ろうあ)者という不具の身で、名もなく貧しく美しく生きた夫婦のドラマは、日本中を感動させたものでした。そして昭和49年、名作シリーズの第一弾として「生きる」が再公開されたとき、この「名もなく——」を再公開してほしいという声が他の名作を越えて一位を占めたのです。

口もきけない、耳も聞えない夫婦に扮するのは小林桂樹と高峰秀子。からだ全体の表情と目と、そして指先で語りかける手話の演技は、このドラマをいっそう盛り上げ、文部省の特選映画となり、高峰はサンフランシスコ映画祭で主演女優賞を獲得しました。

おそらく、このときの感動、話題が15年を経た今にもなお生きつづけて、再上映の要望となつたものでしょう。たしかにこれは、日本映画界が放つた不朽の名作と云えるでしょう。

物語

戦争末期から戦後にかけては、日本中の人々が苦しい生活をおくっていた。秋子は夫の死と共に、あつさりとした嫁先をほうり出された。秋子はろうあ者である。実家に帰つた秋子を母は労つてくれたが、姉も弟も冷かした。そんなとき、同じろうあ者の片山道夫が秋子に結婚を申しこんで来た。もちろん秋子はためらつたが、道夫は真剣だった。彼はろうあ者だけに通ずる手話でこう語つた「ボクハ、ヒルモ、ヨルモ、アナタノブシマデ、ハタラクキマス」

秋子の再婚は幸せにいそいそに思われた。元氣な赤ちゃんが生まれた。ものが云えない二人から生れた子は、はたして口がきける子供なのだろうか。二人の不安は長く続いた。そして、ある日、子供が茶碗の音をたしかに聞きわけたと知つたときの二人の喜びはすさまじいものだった。それだけに、この最愛の子を、二人の耳が聞えないために死なせてしまつたときの悲しみは、筆舌につくしがたいものがあつた。有楽町のガード下で靴みがきをはじめた二人の家に秋子の母が転がりこみ、二人目の子供が

生まれて健全に育つていった。貧しいながら波風の立たない何年間かが過ぎた。子供の一郎は成長するにつれて、不具者である両親をうとんじる気持を持ちはじめた。秋子のグレた弟が内職用の大切なミシンを売りとはしてしまつた。無理して貸した金はたおされ、内職の金は不当にごまかされた。絶望した秋子は、自分の身内が夫に迷惑をかけたつづけたことを悩んで家を出た。

逃げるように秋子が乗つた電車に、置手紙を見た道夫が飛び込んだ。開かない連結扉の窓ガラス越しに必死に手話で語りかける道夫。「アナタの苦しきはワタシの苦しみです。二人で助け合つていくという約束を忘れたのですか」秋子は自分が間違つていたことを知り、夫の愛情の深さをいまさながら知らされた。

秋子は道夫と結婚する以前に一人の戦災孤児を救つたことがあつた。その子は上野アキラといつた。二十数年たつた今になって、立派に成長して自衛隊員となつたアキラが、恩人の秋子を探してあつた。思いがけない報せに喜んだ秋子は我を忘れて大通りへとび出した。疾走してきた大型のトラックに秋子の小さな身体が絡んで消えた。秋子を認めて、トラックが激しく警笛を鳴らしたにもかかわらず、秋子の耳は危険を察知出来なかつた。

秋子の墓標の前で、道夫は、かつて秋子が指で語つた言葉を思い出していった。「ワタクシチハ、ハジメカラクルシムタメニ、ウマレテキタキガシマス、デモ、アナタガイレバ、コウフクデス」その通りだったと道夫は思う。そして「ボクはこれからどうしたらいいのですか」と墓標に語りかけた。そして一年もたたぬうちに妻のあとを追つた。

キャスト

製作……藤本真澄
脚本・監督……角田健一郎
撮影……松山善三
美術……玉井正夫
録音……中古智
照明……狩野健
音楽……長岡憲治
監督助手……石井長四郎
製作担当……平山晃生
スチール……大久保欣四郎
岩井隆志
吉崎松雄
木島先生
河内桃子
片山道夫……高峰秀子
秋子の母……小林桂樹
姉……信子草
弟……弘一沼田
泉……心本
心……松本
みよ……荒木
浩子……根岸
悦……高橋
アキラ……加山
おかみ……藤原
中北千枝子
河内桃子

